

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：34319

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520120

研究課題名(和文) 両大戦間パリにおける挿絵本文化の学際的研究

研究課題名(英文) Interdisciplinary Research on the Culture of Illustrated Books in Paris between Two Great Wars

研究代表者

林 洋子 (HAYASHI, Yoko)

京都造形芸術大学・芸術学部・非常勤講師

研究者番号：30340524

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、両大戦間パリにおける挿絵本文化について、美術史学、比較文化・文学、出版史、日本学など学際的な視野から総合的に検証を行ったものである。この間、パリで30冊以上の挿絵本に関わった日本人画家・藤田嗣治を起点としつつ、「文学者」「画家(美術家)」「出版人」「版画工房」の相互交流と成果について具体邸に把握することを目指した。研究期間中に美術館における二つの展覧会開催に協力し、関連シンポジウムを催し、報告書もかねて研究論集『テキストとイメージを編む 出版文化の日仏交流』(勉誠出版)を刊行した。

研究成果の概要(英文)：This research project deals with a topic on the culture of illustrated books in Paris between Two Great Wars, by the interdisciplinary approach as art history, comparative literature and culture, history of publication, and Japanese studies. Under the three years research, we aimed for gripping with the relation among author, artist, editor and printer, and with their fruits. Foujita, Japanese artist, who illustrated more than 30 books in Paris in this period, is the core of this research. In the end, we published a books of articles "Marier texte et image: Exchange of Publishing Culture between France and Japan".

研究分野：美術史

キーワード：挿絵本 両大戦間 パリ 出版文化 藤田嗣治 ジャン・ジロドゥー 日仏交流

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで、科研費などを受け、画家・藤田嗣治(1886-1968)の絵画を中心に美術史や保存科学・修復の側面から研究してきたが、この画家が生涯、挿絵本の制作に関わっていたことが徐々に浮かび上がってきた。2009年に亡くなった藤田夫人が、その最晩年に画家旧蔵の書籍類を東京国立近代美術館アートライブラリに寄贈したことが大きい。その整理、公開に関与し、『藤田嗣治 本のしごと』(集英社新書、2009)を刊行するなかで、一歩進んだ学術研究と展覧会、シンポジウムの企画の必要性を痛感するようになった。

藤田は両大戦間のパリで30冊以上の挿絵本に関わっているが、とりわけ1941年11月にパリで刊行された劇作家ジャン・ジロドゥ(Jean Giraudoux 1882-1944)作、藤田挿絵の『イメージとのたたかい Combat avec l'image』(エミール=ポール・フレール社)に注目した。第二次大戦下、藤田本人が日本に帰国して不在の時期に、ジロドゥの「テキスト」と藤田が描いた「眠る女」の「イメージ」一点のみが多彩にレイアウトされた出版物である。幸い、ジロドゥ研究者で、演劇史・比較文化を専門とする間瀬と知り合い、意見交換した結果、一連の出版が単なる作家や画家の個人的な能力や適性を超え、両大戦間パリの「挿絵本文化」に下支えされていたのではないかという仮説に至り、それを検証するための共同研究に向かうこととした。

2. 研究の目的

本研究は、両大戦間パリにおける挿絵本文化(出版文化)について、美術史学、比較文化・文学、出版史、日本学など学際的な視点から、実証的かつ総合的に検証するものである。その際、この間にパリで多数の挿絵本に関わった日本人画家・藤田嗣治を基点としつつ、「文学者」「画家/美術家」「出版人」「版画工房」の相互交流と成果を具体的に把握することを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、2012年夏に開催予定の「藤田嗣治と愛書都市パリ」展(北海道立近代美術館、渋谷区立松濤美術館)、2013年春の「藤田嗣治 本のしごと」展(千代田区立日比谷図書館)の開催準備に関わり、現物の調査、収集、分析をしながら、同時並行で関連シンポジウムを企画した(2012年10月14日「両大戦間パリの挿絵本文化をめぐって」:北海道立近代美術館、2013年9月21日「日仏出版文化の出会い 幕末から両大戦間ま

で」:日仏会館)。大規模なシンポジウムのインターバルには、小規模な研究会を都内で催し、藤田やジロドゥの活動を相対化するような作家や挿絵本に関する発表をそれぞれを専門とする研究者を招へいして行った。

当初、林と間瀬の専門もあって「両大戦間」の「パリ」という期間と場を限定してスタートしたが、二年目からは東京の日仏会館でクリストフ・マルケフランス事務所長が主宰する江戸の出版文化研究会と連動することで、最終的には日本とフランスの19世紀半ば、幕末の開国以降の「出版文化」の交流、比較のコンテキストのなかから、藤田のパリでの作例を見直すことを目指す方向へと展開しえた。

また、研究開始時点では「挿絵本文化」との研究課題名で申請していたが、ほかの時代や領域の研究者と交流するなかで、「出版文化」という表現がよりの確であることを知った。本「挿絵本」を支える個別の書き手や挿絵の担い手、作品だけでなく、むしろそれらを支えた編集者や出版社、印刷業、流通や愛書家、読書まで含めた文化的背景を「出版文化」ととらえることとした。

研究のスケジュールは以下の通り

- ・初年度 平成24(2012)年度
北海道立近代美術館、千代田区立図書館文化館での展覧会の準備協力
上記に連動したシンポジウムの企画と開催
国内外での図書館、美術館での所在と現物調査
- ・第二年度 平成25(2013)年
国内外での図書館、美術館での所在と現物調査の継続
日仏会館でのシンポジウムの開催
を補完する研究会の開催
最終年度に刊行する報告書に向けた原稿整備、出版社の確定
- ・第三年度 平成26(2014)年
報告書の編集と出版

4. 研究成果

三年間の研究成果については、『テキストとイメージを編む 出版文化の日仏交流』(林洋子、クリストフ・マルケ編、勉誠出版社)として単行本として、2015年2月に出版した。この間、シンポジウムや研究会に関わった全16名による研究論文集である。

同書は二部構成とし、第一部「媒体としての書物 文化を超えて結ぶかたち」では日本とフランスの出版文化の双方向的な交流について19世紀後半を中心にたどった。第二部は「場としての書物 テキスト、イメージ、

媒介者」として、両大戦間のパリでの挿絵本出版における、著者・画家以外の第三の存在＝編集者、プロデューサー的な媒介者を具体的に浮かび上がらせた。タイトルには「テキスト」と「イメージ」を組み合わせる主体的な存在を強調すべく、「編む」という言葉を選んだ。

本研究の契機となった藤田とジロドゥの接点は、本書の複数の論文でも扱われ、なかでも間瀬と柳沢の連携によって、両大戦間のパリで版画家兼アート・ディレクターとして顕著な活躍をしていたジャン＝ガブリエル・ダラニエス(Jean-Gabriel Daragnès 1886-1950)が取り結んだことが今回、あらたに判明した。同時代には広く知られていても、今日ではフランス本国ですらごく限られた専門家以外には忘却された人材を発掘する機会となったが、さらに藤田の両大戦間のパリでの出版関連のしごとの「要」としてのダラニエスを理解することにもつながった。

同書目次

林洋子〔専門分野：美術史、京都造形芸術大学〕序文 日本とフランスの「出版文化」の波打ち際で
芳賀徹〔比較文学・文化 東京大学/静岡県立美術館〕「画文交響」のたのしみ
フィリップ・ル・ストウム〔美術史、ブルターニュ県立美術館〕(鶴飼敦子・訳) 日本からの教示 1889年から1939年までのフランスにおける多少木版画

第一部

高木元〔日本文学、千葉大学〕19世紀における日本の出版文化
岩切信一郎〔版画史、新渡戸文化短期大学〕和装本から洋装本へ その試行錯誤と展開
清水勲〔仏学史、日仏学史学会〕近代日本諷刺画成立へのフランスへの影響
大塚奈奈絵〔比較文化、国立国会図書館〕明治半ばの欧文挿絵本出版状況 長谷川武次郎のちりめん本を中心に
吉川順子〔日仏文化交流史、信州大学〕19世紀後半のフランスにおける日本関連出版物と挿絵 鳥というモチーフが担った役割
尾崎有希子〔美術史、早稲田大学〕イタリアへの波及 ジュディット・ゴートイエ『蜻蛉集』とダンヌンツィオ「西洋うた」

第二部

小林茂(比較文学、早稲田大学) 挿絵本研究のための覚書 日仏間の相互影響研究を目指して
石橋正孝(仏文学、立教大学) 「演出家ならぬ本出家」P.=J.エッツェル ジュール・ヴェルヌと編集者の協働関係における演劇の比喩をめぐる

間瀬幸江(演劇史、宮城学院女子大学) テキストを「演出」する ジャン＝ガブリエル・ダラニエスと挿絵本出版 ジャン・ジロドゥとの協働を例に
柳沢弥生(美術史、北海道立近代美術館) 変容する都市の肖像 『タブロー・ド・パリ』から『パリ 1937』へ
佐藤幸宏(美術史、北海道立近代美術館) 挿絵本『ダフニスとクロエ』に見るギリシア帰と古典主義
片野道子(美術史、天一美術館) 『黄金の聖書』と藤田嗣治

クリストフ・マルケ(美術史・出版文化史、日仏会館) 出版文化の日仏交流をふりかえって

本書刊行後、東京新聞で紹介され、北海道新聞でも文化面で特集記事が掲載された(中村三春〔北海道大学教授〕『テキストとイメージを編む』に寄せて 挿絵通じ日仏交流史解明)北海道新聞朝刊、2015年5月13日)

本研究と出版は、当該分野に関心を持つ、美術史、日本文学、仏文学、比較文化・文学、日本史ほかの研究者の学際的な広がりのおこりとなっただけでなく、若い世代への誘いとなったことを喜びたい。シンポジウムや研究会を通じて知り合った大学院生級には、報告書でのコラム執筆や年表作成で参加してもらい、業績に加えた。

今後については、長期的には本研究会に参加したメンバーがそれぞれの専門分野に立ち帰って、「出版文化」による研究を促進して下さることを期待している。短期的には、2016年春に西宮市大谷記念美術館(兵庫)で藤田の挿絵本に関連する展覧会が予定されており、そこに向けて研究の継続・展開し、再度、研究発表の場を準備したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 1件)

林洋子、クリストフ・マルケ編、勉誠出版社、『テキストとイメージを編む 出版文化の日仏交流』

〔その他〕
ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者

林 洋子 (HAYASHI, Yoko)
京都造形芸術大学・芸術学部・非常勤講師
研究者番号：30340524

(2)研究分担者

間瀬 幸江 (MASE, Yukie)
宮城学院女子大学・学芸学部・准教授
研究者番号：20339724

(3)連携研究者

なし